〔千葉医学　74：127～138，1998〕

〔学会〕

第939回 千葉医学会例会
第12回 磯野外科例会

日　時：平成8年12月14日（土）午前9時～午後4時50分
　　平成8年12月15日（日）午前10時～午後4時50分
場　所：千葉大学医学部附属病院　3階　第1講堂

1．腺扁平上皮癌の1切除例

大平　学（千大）

症例：63才男性。主訴：褐色尿，黄疸。ERCPにて膵頭部主膵管の狭窄及び総胆管下部の狭窄を認めた。膵頭部はCTにて不均一な濃染を呈した。DUPAN-2は160U／ml以上，SPAN-1は220U／mlであった。膵頭部癌の診断にて幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。病理組織は径2cmの腺扁平上皮癌であった。術後10ヶ月現在無再発生存中である。本邦報告126例について文献的検討を加えた。

2．食道早期粘表皮癌の1切除例

羽成直行（千大）

患者は65才男性。主訴なし。既往歴：53才で胃癌にて幽門側胃切除術。家族歴：父母に胃癌。平成6年7月ドックにて食道癌を指摘され，生検は扁平上皮癌だった。30～35cm（Im）に1／2周のⅡc病変認め，同8月右開胸開腹胸部食道全摘胸骨前頚部食道回結腸吻合術施行した。Stlで肉眼所見は6×3.3cm，0-Ⅱb＋Ⅱc病変を認めた。組織は粘表皮癌Sm3n0m0p1o1y1v0inf0st0で，術後29ヶ月現在無再発生存中である。食道早期粘表皮癌の1例を若干の文献的考察を加え報告した。

3．乳腺原発扁平上皮癌の1例

赤井　崇（千大）

症例は50歳女性。主訴は左乳房腫瘤。左乳房AB境界に長径2cmの腫瘤を触知した。超音波検査で嚢胞を認め，D-MRIでは辺縁が急速に増強される腫瘤を認めた。穿刺吸引細胞診で扁平上皮癌の診断となり，平成8年5月10日，Bt＋Ax＋Ic施行，T1n0m0StageⅠであった。術後8ヵ月経過し再発の兆候はない。乳腺原発扁平上皮癌は本邦では201例が報告されている。その予後はStageⅢ，Ⅳで，腺癌に比べ有意に悪かった。

4．肺原発転移性膵癌と思われる1切除例

吉永有信（千大）

症例は65歳男性。95年5月肺癌にて右肺上葉切除術施行。同年10月左肺癌再発と診断。術前検索にて膵体部腫瘍を認め，原発性膵癌と診断し96年3月肺部分切除術施行後，膵癌手術目的にて当科転科。同年5月膵体尾部横行結腸脾臓合併切除術施行。初回切除肺との組織類似性より転移性膵癌を疑い，CA19-9染色，K-ras mutationより転移性膵癌と診断。その切除例は本邦8例目であり，その診断は困難で，このような症例にCA19-9染色，K-ras mutationが有用と思われた。

5．サイトカイン遺伝子導入細胞による抗腫瘍効果の基礎的検討

田崎健太郎（千大）

〔目的〕サイトカイン遺伝子導入細胞の抗腫瘍効果をみるため実験的肺転移抑制実験を行った。
〔方法〕IL-2産生腫瘍皮下注後親株または別株を静注した。
〔結果，考察〕IL-2産生腫瘍皮下注にて腫瘍特異的免疫獲得し肺転移抑制したが，低産生腫瘍は局所腫瘍を拒絶できない。
〔今後の展望〕RT-PCRでcloningしretrovirus作成中の細胞性免疫担当Th1細胞に作用するIGIFの抗腫瘍効果を検討する。

6．乳癌に対する遺伝子治療の基礎的検討

前田智子（千大）

レトロウィルスベクターを用いてヒト乳癌細胞にp53及びGM-CSF，IL-2，IL-4遺伝子を導入し，それぞれの遺伝子導入乳癌細胞株を樹立した。次に各サイトカイン遺伝子導入癌細胞に放射線照射を加えてもサイトカイン産生は認められたが，細胞増殖能は抑制された。また，ヌードマウス皮下腫瘍モデルではGM-CSF遺伝子導入細胞で腫瘍の退縮を認め，乳癌に対する遺伝